国語　6年間を通じて見た児童生徒の状況

「書くこと」の力が学年が上がるとしっかり身に付ける児童生徒の割合が増えている。国語の授業を通じてこうした力を高めると、他教科や生活の中で生きて働く力を育むことができる。

算数・数学、社会、理科の指導に生かす

子どもたちの発達の段階を踏まえた学習の系統性を重視し、学校段階・学年段階ごとに、具体的に身に付けるべき能力を育成し、重点的な指導が行われるようにする。（平成20年1月中央教育審議会答申から）

低学年での指導へ

小4

P22
「文の構成を理解する」
正答率40．4%
難易度☆☆

P24
「目的に応じて理由や事例を書く」
正答率29．6%
難易度☆☆☆

小5

P26
「修飾と被修飾の関係を正しく理解する」
正答率32．8%
難易度☆☆☆

P28
「理由や事例を挙げて書く」
正答率49．1%
難易度☆☆

小6

P30
「慣用句の意味を理解する」
正答率20．1%
難易度☆☆☆

P32
「資料を参考に、問題の解決方法を書く」
正答率40．2%
難易度☆☆

中1

P34
「文の構成を理解する」
正答率15．4
難易度☆☆☆☆

P36
「根拠を用いて自分の意見を明確に書く」
正答率53．6%
難易度☆☆

中2

P38
「登場人物の言動や信心情の理由を読み取る」
正答率72．4%
難易度☆

P40
「取材をもとに、文章を構成する」
正答率50．6%
難易度☆☆

中3

P42
「動詞の活用の理解」
正答率10．6%
難易度☆☆☆☆

P44
「根拠を基にして自分の意見を書く」
正答率69．1%
難易度☆

文の正確な理解につながる、文法的な事項が定着している児童生徒の割合がけっして高くない。普段の授業の中で意識して継続的に指導に取り組むことが大切である。

埼玉県の子供たち
「文章の読解力が高い」
背景
「文章を読んで考えたことについて発表する活動を授業に多く取り入れている」

有識者からのコメント（埼玉大学准教授　本橋　幸康　氏）

従来の読解重視の問題ではなく、主として学び方や言語活動能力、方法知を問う問題が出題されている。まさに、生きて働く力を測る調査となっている。この点については、全国学力・学習状況調査と同様のコンセプトである。

6年間を通じて文学的文章の理解が優れていることが窺える。これは、言語活動の充実を図りながら、考えを交流するなど、主体的な学習活動を展開している教師の取組の成果であろう。

反面、文法の問題の正答率が低い。GP分析から学力の高い層の児童生徒でも正答率が低いようである。問題文が日頃目にする文章と異なり、（主語・述語・修飾語でしっかり構成されている。物語の文や説明文は、一部省力されていることの方が多い。）人工的であることも一つの要因ではないか。底上げを図る必要があるであろう。

また、小学校4年生の正答率が他学年と比較すると低いのは、問われ方に戸惑っているのではないかと考えられる。授業での教師からの問われ方とテストでの問われ方に乖離があるということである。日頃の授業でも、複数の条件を満たして自分の考えをまとめるなど問い方を工夫する必要があるのではないか。